

# 境界知能領域にある自閉スペクトラム症児に対する 検索による学習の効果

定型発達児との有効性の比較

○堀田千絵

十一元三

(関西福祉科学大学 教育学部) (京都大学大学院医学研究科)

KEY WORDS: 長期保持, 境界知能領域, 自閉スペクトラム症

(目的)

社会生活を円滑に営む上で記憶が適応的に働くことは重要であり、それは幼児期の子どもにおいても同様である。古くから幼児の記憶の働き、特に記憶方略の使用、その効果に関する未熟さが指摘されてきた。しかし、本研究が対象とする境界知能領域にある幼児の記憶特性については研究の蓄積が乏しく明確な回答を得ていない。

ここでいう境界知能領域における自閉スペクトラム症幼児とは、一般的にIQが70から85の領域にある就学前の自閉スペクトラム症の特性を有する子どもを指し、知的発達症においては診断に至らない程度である。

そこで本研究は、成人の研究、語彙発達に遅れのある幼児にも有効性が確認されている検索による学習について、境界領域にある自閉スペクトラム症幼児にも認められるかどうか検討することとする。

(方法)

**参加幼児と群分けの基準** 自閉症スペクトラム障害と診断された幼児30名のうち、境界知能領域にある者14名、定型発達児13名であり、生活月齢72~81か月の年齢範囲であった。先天性疾患の特定の診断を有す幼児は対象から除外した。記憶実験と同日に、対象幼児に対して田中ビネー式知能検査を実施した。

**実験計画** 2×2×3の混合要因計画によって実施した。第1要因は群であり、境界知能領域にある自閉症スペクトラム群、定型発達群であった。第2要因は学習条件であり、反復リハーサル、反復検索であった。第3要因は直後テスト、5分後テスト、3時間後テストであった。第1要因のみ、参加者間計画であった。

**材料と手続き** (1)初回学習と回答チェック: 実験者は幼児とコミュニケーションを十分に図った後、対象幼児すべてに対し、クイズごとこと称し、3項目について、学習項目を尋ね(e.g., クジラは何を食べると思う?)、正答数をチェックした。(2)反復リハーサル/反復検索: 両教示条件と

もに学習時間を2分とし、反復検索群には学習項目について一度正答を教えた後、3回検索を繰り返した。反復リハーサル群は、学習項目について一度正答を教えた後、再度同様の話をした。(3)テスト: すべての幼児に対して、直後、5分後、3時間後にテストを実施した。

(結果と考察)

Fig.1に、学習条件における定型発達児と境界知能領域における自閉スペクトラム症児の課題別の平均正答数を示した。幼児が回答できた項目数を従属変数とし、2(群)×2(学習)×3(保持)の混合要因の分散分析(ANOVA)を実施したところ、学習条件( $p < .01$ )、課題( $p < .001$ )の主効果が有意であった。また、学習×保持( $p < .05$ )の交互作用が有意であった。

以上の結果を詳述すると、全体として定型発達児の方が境界知能領域にある自閉スペクトラム症児よりも成績が高かった。また、反復検索の方が反復リハーサルよりも全体的に成績が高く、直後テストは5分後テスト及び3時間後テストよりも成績が高かったが、5分後と3時間後では差がなかった。さらに、事前課題では反復リハーサルと反復検索で差がないが、5分後、3時間後では反復検索の方がリハーサルよりも高くなることがわかった。また自閉症スペクトラム群でも定型発達群でもその傾向は変わらないが、定型発達群では有意に精緻化よりも反復検索において成績が高くなることがわかった。

本研究の結果から、先行研究と同様に、ストーリー聴取に基づくリハーサル学習よりも情報の反復検索を行う方が、長期保持を促すことがわかった。さらに、境界知能領域における自閉症スペクトラム児は全体として成績は低かったが、定型発達児と同様の傾向を示した。

今後、対象幼児を増やし、効果について再検証するべきだと考える。

(HOTTA Chie, TOICHI Motomi)

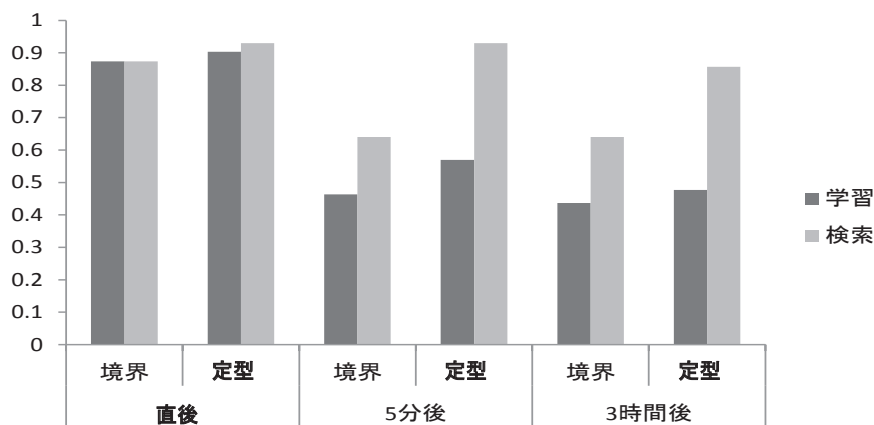


Fig. 1 学習条件におけるTD(定型発達児)及び境界知能領域にある自閉症スペクトラム児の課題別の平均正答数